

顕彰隠密

ノート

山上正尊案

20241111 真宗学寮オンライン会読

資料

【参考】「三経隠顕」提要と判決

4 【参考】「執持名号」判決

会読案

7 出拠

8 积名

12 「義相①」『観経』隠顕

16 「義相②」『小経』隠顕

33 三経一論と『教行信証』

■【参考】「三経隠頭」提要と判決

□昭和三十七年 提要

三経隠頭

出拠

教文類の教体の釈。

化身土文類の隠頭釈。

釈名

隠頭の字義。

義相

観経の隠頭。

小経の准知隠頭。

三経一致と差別。

帰結

三経の説相に差別あるも、意は弘願をあらわすにあることを明らかにする。

□昭和三十七年 判決

本題は三経に亘るのであるが、隠頭の問題点は観経にある。それは観経は余経と異り、教主に釈迦弥陀二尊があり、経体には要弘二門があり、仏意に随自・随他があり、機根に生熟があり、宗旨に念観両宗があり、念佛に亦、仮を帯びるものがあるなど、まことに混然として窺い難い。そこで終南大師は経末に至って「上来雖説」と、上来の定散を廃して他力の念仏を立て玉うた。宗祖大師またこれを一経に亘って隠頭釈を設け、一経の始めから廃立の義あることを知らしめたのが化巻の顕彰隠密の釈である。これを釈するに就て、勞謙院、専称院、晃暁院、宣布院など各と力をつくして論じておられる。これを指針に化巻の釈を窺うと標には顕彰隠密として、釈には「是顕義也」と頭を釈し、「斯乃此（経）隠彰義也」と隠と彰を出しておられる。宗祖の意は顕彰の三義と御覽になつていと思われる。即ち三義を開けば四義ともなり三義を合すれば隠頭の二義ともなりましょう。まず道理からいっても、観経の頭説は定散二善だ。これは他師も争はない。また隠説は未熟の機のために弘願を隠蔽していることにも異論はないであろう。宗祖力を尽して釈頭されたは彰露の文でありましょう。しかるに彰も亦頭に対すれば隠に属せざるを得ない。即ち仏は弘願を彰露すと雖も機執これに仮をかけて要門と窺うものもある。仏は亦これを黙許される。此時は彰は隠に撰属されて隠頭の二義となることもある。畧典に「三経大綱雖有隠頭一心爲能入」とあるは此意でありましょう。開いて四義とするものは、頭の外に隠と彰があり、彰の中に隠即彰があり、隠ノ彰があり、此外に但の彰露の文がある。これで四義になります。

但の彰露の文とは文面に切出て弘願の義を顕す文で七八両観がそれであつて十三文例の中には出ていない。これが一つ、隠ノ彰は十三文例の第一に「教我觀於清淨業處の如く真仮両通のものもあり、文相は仮にして自ら弘願を示す文もある。之を隠ノ彰といつてこれで二つ、また但の隠にして弘願を全く隠すものもある。之を隠即彰という。これで三つ、そして頭説を加えたら四義となる。此義によつて十三文例を見れば始めの五文は隠ノ彰に当り、次の六文は隠即彰の文であ

る。最後の十二、十三文は顕説を出されたものだ。顕彰隱の三義を立て、観経を積する人は雲龍の譬で説明している。四義を立つる人はモミウラ隠顕という語を立てる。表に黒衣を張るものは顕説であり裏面に赤いモミウラをつけて表に顕われざるものは隠即彰に当る。表に黒衣を張れども暗々裡に赤色を漏らす、これを隠ノ彰に譬える。更に袖口に赤いモミウラを漏らすものは七八両觀の如き彰露の文に合せる。四義と雖も隠と顕に対する時は彰の外はないから三義となり、更に合すれば要弘隠顕の二義に皈す。如此宗祖は隠顕積を以てせられた。准知隠顕は小経修因段を以て観経に准知して隠顕ありと見られた。三輩隠顕は大経は顕露彰灼の経であるから隠顕なしという説が至当でありましょう。

□平成二十二年 提要

(題意)

宗祖の隠顕積をとおして、三経の説相に差別あるも、意は弘願をあらわすにあることを明らかにする。

(出拠)

「化身土文類」隠顕積

(釈名)

「三経」

「隠」

「顕」

「顕彰隱密」

(義相)

『観経』の隠顕

『小経』の准知隠顕

三経一致と差別

□平成二十二年 判決

【題意】

宗祖の隠顕積をとおして、三経の説相に差別あるも、意は弘願をあらわすにあることを明かにする。

【出拠】

『教行証文類』「化身土文類」(『真聖全』二、一四七)

問。大本三心、与観経三心、一異云何。答。依釈家之意、按無量寿仏観経者、有顕彰隱密義。言顕者、即顕定散諸善、開三輩・三心。然二善・三福、非報土真因。諸機三心、自利各別而非利他一心。如来異方便、折慕浄土善根。是此経之意、即是顕義也。言彰者、彰如来弘願、演暢利他通入一心。縁達多・闍世惡逆、彰釈迦微笑素懷、因章提別選正意、開闡弥陀大悲本願。斯乃此経隠彰義也。

『教行証文類』「化身土文類」(『真聖全』二、一五六)

又問。大本・觀經三心、与小本一心、一異云何。答。今就方便真門誓願、有行有信、亦有真實有方便。願者、即植諸徳本之願是也。行者此有二種、一者善本、二者徳本也。信者、即至心回向欲生之心是也。二十願也。就機有定有散。往生者此難思往生是也。仏者即化身。土者即疑城胎宮是也。准知觀經、此經亦応有顯彰隱蜜之義。言願者、經家嫌貶一切諸行少善、開示善本徳本真門、勵自力一心、勸難思往生。是以經説多善根多功德多福徳因縁、釈云九品俱回得不退、或云無過念仏往西方、三念五念仏來迎。此是此經示願義也、此乃真門中之方便也。言彰者彰真實難信之法。斯乃光闡不可思議願海、欲令歸無礙大信心海。良勸既恒沙勸、信亦恒沙信、故言甚難也。釈云直為弥陀弘誓重致使凡夫念即生。斯是開隱彰義也。また、『浄土文類聚鈔』(『真聖全』一、四五三)にも同様の趣旨の文がある。

【釈名】

「三經」とは『仏説無量寿經』『仏説觀無量寿經』『仏説阿弥陀經』のことである。「隱」とは「隱彰」の意で、その經に隱微に説かれている法のことであり、『觀經』『小經』の「隱彰」は他力念仏による往生法である。「顯」とは「顯説」の意で、その經に顯著に説かれている法のことである。『觀經』の顯説は自力諸行の往生法であり、『小經』の顯説は自力念仏の往生法である。そして「顯彰隱密」とは、『觀經』『小經』に顯説と隱彰があり、このような説相をあえて用いられたのは釈尊の深い密意であると示したものである。

宗祖は、標には顯彰隱密として、釈には「是顯義也」と「顯」を積し、彰については「斯乃此經隱彰義也」と「隱」と「彰」を出しておられる。この顯彰隱密の分釈については、諸説あるが、宗祖の釈には「顯」と「彰」(「隱彰」)の釈のみであり、それ以上の分類は根拠を見いだせない。よって顯説(顯)は要門義、隱彰(彰)は弘願義と見るのが妥当であろう。これらは一經の説相について言うものである。

【義相】

①『觀經』の隱顯

『觀經』は余經と異なり、教主に二尊があり、教義に要・弘があり、仏意に随自・随他があり、機根に熟・未熟があり、宗旨に念・觀があるなど、混然としており、たやすく窺うことはできない。善導大師・法然聖人は、念觀廢立の釈義によって『觀經』を理解されるが、それでは経末に至らなければ廢立が判然としない。よって、宗祖は隱顯釈を設けてその時々には廢立を示すのである。そのことを「化身土文類」(『真聖全』二、一四七)に、

依釈家之意、按無量寿仏觀經者、有顯彰隱蜜義。
と述べ、『觀經』の隱顯を示された。これは、善導大師の『觀經疏』「玄義分」(『真聖全』一、四四六)の、

今此觀經即以觀仏三昧為宗、亦以念仏三昧為宗。一心廻願往生淨土為體。

また、『觀經疏』「散善義」(『真聖全』一、五五八)の、
上來雖説定散兩門之益、望仏本願意、在衆生一向專称弥陀仏名。

などの文に依ったものである。顕説とは要門のことを指し、隠彰とは弘願を指すものである。それは「化身土文類」〔真聖全〕二、一四七）に以下のように示される。

言顕者、即顕定散諸善、開三輩・三心。然二善・三福、非報土真因。諸機三心、自利各別而非利他一心。如来異方便、欣慕淨土善根。是此經之意、即是顕義也。言彰者、彰如来弘願、演暢利他通入一心。縁達多・闍世惡逆、彰釈迦微笑素懷、因韋提別選正意、

開闡弥陀大悲本願。斯乃此經隱彰義也。

『観経』の顕説の義は、定散二善すなわち自力諸行による往生が説かれた法門である。しかし、この法門は自力諸行による化土往生の法門であって、真実報土の往生をあらわす法門ではない。『観経』にこのような方便の法門を顕著に説かれたのは、真実を方便で隠し、方便をさも真実のごとく説くことによって、聖道に執する者をして浄土願生を勧めようとされる、特別な従仮入真の仏意があることを明かそうとされたものである。

宗祖は次いで「斯乃此經隱彰義也」と、『観経』が隠顕の両義を持つ經典であることを示し、以下に十三文例を挙げる。『六要鈔』〔真聖全〕二、三八六）には「此一段者今師聖人己心領解、隠彰意也」と言われており、隠彰の例文を挙げたものと見ている。そうして最後に、『真聖全』二、一四八）

良知、此乃此經有顕彰隱蜜之義。二經三心、將談一異、応善思量也。大経・観経依顕義異、依彰義一也。可知。

と問答を結ばれる。『大経』の三心と『観経』の三心を対比してみると、経の「顕」の義からいえば異なっているが、「彰」の義からいえば二経ともに選択本願を宗としているから一つであると、二経の三心の一異という問いに答えたのである。

②『小経』の准知隠顕

『小経』は、その顕の義からいえば、『観経』に説かれたような定散諸行を少善根と嫌貶して、大善根である名号を開示されるものの、なおその称念の功德にとられ、自力の心を励まし、難思往生といわれるような化土の往生を勧める真門自力念仏の教説である。しかし、隠彰の義からいえば、諸仏から証誠護念されるような、如来廻向の真実心を極難信の法として勧められており、その一心不乱の信心は三心即一の一心であるとあらわされているのである。宗祖は「化身土文類」〔真聖全〕二、一五六）に、

准知観経、此経亦応有顕彰隱蜜之義。

と『小経』の隠顕を示された。『小経』を見るだけでは、『小経』に隠顕のあることを知りがたいが、『観経』に准じて『小経』を見るならば、この経にも隠顕があることが知られる。それは「化身土文類」によると、『小経』の顕説の義は、善本徳本、つまり自力念仏による往生が説かれた法門であり、隠彰とは弘願、他力念仏による往生が説かれた法門である。しかし、『観経』は隠顕が一経全体にかかるが、『小経』は正宗分のうち、依正段と証誠段は弘願真実の義意をあらわしており、修因段にのみ隠顕がかかるのである。

③三経一致と差別

『大経』と『観経』・『小経』の顕説とを組み合わせれば、『大経』所説の法義は弘願法、『観経』所説の法義は要門法、『小経』所説の法義は真門法となり、三経所説の法義は相違する。しかし、『大経』と『観経』・『小経』の隠彰とを組み合わせれば、三経所説の法義はいずれも弘願法として一致する。

なお、先哲に『大経』の隠頭の義の有無が論じられる。これは胎化得失や流通分に見られる自力往生の説示と関連するものである。しかし、そもそも隠頭は説相についていうことであるから、真仮と同視してはならない。あくまで『大経』は顕露彰灼の経であり、弘願法のみがあらわされている。

■【参考】「執持名号」判決

□執持名号 平成18年

〔題意〕

『小経』修因段について宗祖は准知隠頭の積をなされた。隠頭積による執持名号の積意を明らかにする。

〔出拠〕

・『阿弥陀経』修因段

「聞説阿弥陀仏 執持名号 若一日（中略）若七日一心不乱」（『真聖全一、六九』等）。

・『本典』「化身土文類」本、

「経言執持亦言一心 執言彰心堅牢而不移転也 持言名不散不失也 一之言者名無二之言也 心之言者名真実」（『同』二、一五七）等。

・『略典』（『同』二、四五三）

・「化身土文類」本、狐山『疏』の文（『同』二、一六二）

・（関連文）

「易行品」（『同』一、二五八）、

『往生礼讃』後序（『同』一、六八三）、

『法事讃』（『同』一、五九七）、

『往生要集』下末の往生階位（『同』一、八九八）、

『漢語灯録』（小経积）（『同』四、三六六）、

『唯信鈔文意』（『同』二、六四九）

〔积名〕

「化身土文類」に「執は心堅牢にして移転せず、持は不散不失に名づく」とあり、『略文類』もほぼ同じ。狐山智円の『阿弥陀経義疏』には「執は執受、信力の故に執受にして心に在り。持は住持、念力の故に住持して忘れず」と釈す。

要するに、執持の「執」とは堅固如実に名号を領受し、「持」とは憶持して忘れず相続するの義である。「名号」は南無阿弥陀仏、本願成就の果名であり、所聞所信所称の法体をあらわす。

〔義相〕

一、化身土文類の积

『小経』所説の執持名号を、宗祖は『本典』「化身土文類」真門积に解釈されている。そこには、准知隠頭、嫌貶開示の积がなされてある。よって、執持名号義をも隠・顕の二积をもって解釈するのである。

二、准知隠頭の积義

准知隠頭とは、『観経』に准知するに、この『経』にまた顕彰隠密の義あるべし」と示し、「顕」といふは、経家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本徳本の真門を開示し、自利の一心を励まして

難思の往生を勧む」等とし、「彰といふは、真実難信の法を彰す。これすなはち不可思議の願海を光闡して、無礙の大信心海に帰せしめんと欲す」とお示しである。『観経』に「隠顕積がみられるように、『阿弥陀経』も『観経』に准知して、この修因段に隠顕積を用いられる。直接的には『観経』の下三品の念仏と付属の持名に准知する。即ち『小経』の修因段に「不可以少善根」は『観経』の諸行を指し、『小経』は多善根多福德の念仏を説くとするが、受持する機に熟未熟があり、熟機は直ちに他力仏願の念仏に入るが、未熟の機は諸行を廃しても自力心の機執をもって名号を修する故に自力称名となる。これが顕説の真門自力念仏である。『観経』の定散心に准知して顕説真門を見てゆくのである。『小経』に説く依正二報は真実であるが、この修因段のみ隠顕がみられるのは、多善根の念仏をすすめ、一日七日の念仏の功を策励する行業と、臨終来迎の益が説かれているからである。

三、嫌貶開示の積義

嫌貶開示とは、顕説の所談で、一切諸行の少善根を嫌貶して善本徳本の真門を開示すと述べられてある。宗祖が真門念仏とみられる根拠は『小経』の『襄陽石碑経』の「多善根多功德多福德因縁」の文である。一切諸行少善根を往生不可と嫌貶し、真門念仏を開示するについて疑難が生じる。即ち、諸行少善の不可得生は、真実の報土に対していわれるならば、真門自力念仏も不可得生といわねばならない。もし真門念仏は化土得生というならば諸行もまた化土得生である。化土に對すれば諸行を不可得生とはいえないからである。要するに、諸行は真土にのぞめて不可得生と説かれたものである。ただし、真門は真土にのぞめて開示するのではなく、名号は元來、頓教であるが、自力定散の機は、多善根功德と執じて自力策励する漸機である。機の側から自力称名としている。仏はこの機執に関せず、信疑廃立もいわずして来迎の益をあらわす。故に真門と判ずる。これを世尊の意として「真門を開示し、自利の一心を励まして難思の往生を勧む」と判ぜられたのである。

四、顕説の執持名号義

執持名号の意義について、多く孤山の積を基本に積してある。要するに、執持を心念とすれば心に名号を憶念して忘れず、称名ととれば誦念して忘れず、若一日等はその行時を示すと、善導大師の『法事讃』（「化身土文類」引文）、『往生礼讃』及び源空上人の『小経釈』等、総じて執持名号は称名行として積されている。

宗祖は修因段に隠顕積を用いて、執持名号にも隠顕の両積がみられる。顕説の積意によれば、執持名号とは第二十願の植諸徳本と同じく、自力心をもって名号を称念する意である。「化身土文類」に引かれる元照師の『義疏』に「もしこの経によりて名号を執持せば、決定して往生せん。すなはち知んぬ、称名はこれ多善根・多福德なり」と、自力の信は多善根多功德の名号を憶持して忘れず、一日七日と策励していく相をいう。執持は口業に持（たも）つの義であり、顕説自力の信は起行の一心であって下の「一心不乱と同じ。念々策励して、修する一心なるが故に」「自利の一心を励まして難思往生を勧む」と示されたのである。

五、隠彰の執持名号義

次に隠顕の積義は宗祖は真実難信之法、無碍の大信心と示してすべて信心に約して明かされる。故に執持と一心と同義とし、執は心、堅牢にして移転せず。持は不散不失に名づく。一は無二、

心は真実と解釈される。宗祖が「化身土文類」や『略典』に信に約されたのは信心為本の宗義を開顕するについて執持を即一心と積顕されたのである。信行は本来不離であって『往生要集』の積は能修の心より「執心牢固なれば定んで極楽国に生ず」と示された。

要するに、信に約すれば一心に同じ。若一日若七日は信相続といたうべく、七日に限らない。行に約すれば若一日乃至七日の称名をあらわす。ただし、上の「聞説」は名号を領受したる執持の一心なりと顕す隠顕釈に明示されている。

以上

■出処

『教行信証』「化身土文類」

観経隠頭（187）

答ふ。釈家（善導）の意によりて『無量寿仏観経』を案ずれば、顕彰隠密の義あり。

顕といふは、すなはち定散諸善を顕し、三輩・三心を開く。しかるに二善・三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自利各別にして、利他の一心にあらず。如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。これはこの経の意なり。すなはちこれ顕の義なり。

彰といふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多（提婆達多）・闍世（阿闍世）の悪逆によりて、釈迦微笑の素懐を彰す。韋提別選の正意によりて、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの経の隠彰の義なり。

小経隠頭（二、一九九）

『観経』に准知するに、この『経』（小経）にまた顕彰隠密の義あるべし。

顕といふは、経家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本・徳本の真門を開示し、自利の一心を励まして難思の往生を勧む。ここをもつて『経』（同）には「多善根・多功德・多福徳因縁」と説き、釈（法事讃・下）には「九品ともに回して不退を得よ」といへり。あるいは「無過念仏往西方三念五念仏来迎」（同・意）といへり。これはこれこの『経』（小経）の顕の義を示すなり。これすなはち真門のなかの方便なり。

彰といふは、真実難信の法を彰す。これすなはち不可思議の願海を光闡して、無碍の大信心海に帰せしめんと欲す。まことに勧めすでに恒沙の勧めなれば、信もまた恒沙の信なり。ゆゑに甚難といへるなり。釈（法事讃・下）に、「ただちに弥陀の弘誓重なれるをもつて、凡夫念ずればすなはち生ぜしむることを致す」といへり。これはこれ隠彰の義を開くなり。

【類文】小経隠頭（200）

三経の大綱、顕彰隠密の義ありといへども、信心を彰して能入とす。

■ 釈名

Q 「顕彰隠密」の字義如何。

A 字義（諸橋大漢和辞典より抜粋）

顕

①あきらか 光り輝く。

顕曜

顕赫 明らかにあらはれる。盛んに光り輝く。

顕光 光をあらはす。徳をあらはすをいふ。

②あらはに。あきらかに。はつきりと。おもてむきに。

顕然 あきらかなさま。顕著。

顕表 あらはしあきらかにする。

顕著 いちぢるしい。殊によく知れる。目立つ。又、明らかにあらはす。

顕彰 あきらかにあらはれる。

顕現 明らかにあらはれる。顕見と同じ。

顕示 明示する。

顕明 あきらかにあらはす。

顕露 あきらかにあらはれる。発露する。

隠顕 「荀子、天論」隠顕即内外也。

彰

①あや。

彪 … 華美なる状。凡そ彪は必ず文を成ずる。

章 … 起と止を指す。

彰 … 素綯

②あきらか・あらはれる。著明。彰明。

彰著 あきらかにいちじるしい。よく目立つ。顕著。

③あらはす。あきらかにする。章に通ず。

彰示 あきらかにしめす。明示。

隠

かくす。

隠蔽、かくしおほふ。かくれおほはれる。

隠秘 かくしひめる。又、ひめかくした奥義。

隠微 かくすかであらはれない。

隠密 かくし秘する。

密

①しづか。謐に通ず。静也。默也。

②おくふかい。深。

- ③かくす。もらさぬ。秘密。
- ④かくしごと。私事。私陰。
- ⑤とぢる。闕。
- ⑥やすらか。宓。
- ⑦ひそか。ひそかに。

密会

密行 ひそかに歩き回る

- ⑧こまか。細かにならぶ。

密行 戒を微細に護持するをいふ。

精密

- ⑨ちかい。近づく。したしむ。

親密。密友

- ⑩つまびらか。ただし。

- ⑪つつしむ。慤。

など

Q 顕彰隠密の語はいくつの義に別れるか？

A 「顕」と「彰隠密」の二義。

Q 理由如何。

A 『化身土文類』隠顕釈には『観経』『小経』ともに「顕」と「彰」の義しかない。

Q 文証如何。

A 「観経隠顕」(187)

答ふ。釈家(善導)の意によりて『無量寿仏観経』を案すれば、顕彰隠密の義あり。

顕といふは、すなはち定散諸善を顕し、三輩・三心を開く。しかるに「善・三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自利各別にして、利他の一心にあらず。如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。これはこの経の意なり。すなはちこれ顕の義なり。

彰といふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多(提婆達多)・闍世(阿闍世)の悪逆によりて、釈迦微笑の素懐を彰す。韋提別選の正意によりて、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの経の隠彰の義なり。

「小経隠顕」… 略 「顕の義を示す」「隠彰の義を開く」

Q 「顕」と「彰隠密」の内容如何。

A 「顕」 方便

「彰隠密」 眞実

Q 「顕」と「彰」の違いはあるか。

A 「顕彰」と熟字するときの違いは無い。

ただし字義の違いをみれば

「顕」は あらはに。あきらかに。はっきりと。おもてむきに。

「彰」は 「あや」といい、素朴純朴な文章に飾られた華美絢爛なもの

- Q 宗祖に「顕」と「彰」の違いはあるか。
 A 同義に扱うときと別義に扱うときとがある。
 同義 「信文類」別序(2、65)

夫れれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起す。真心を開闡することは、大聖
 矜哀の善巧より顕彰せり。

別義 「信文類」信一念釈(2、93)

夫れ真実の信樂を案ずるに、信樂に一念あり。

一念とは斯れ

信樂開發の時剋の極促を顕し、 ……時間をあらわす一念の語から直接読み取れる内容
 広大難思の慶心を彰すなり。 ……信心開發の初起に恵まれる信心の内容

本願寺本左訓「ウチニアラス」

「化身土文類」觀經隱顯の最後

二經之三心、依顯之義異也、依彰之義一也。

左訓(内にあらず)

【参考】 岡本法治師「三經隱顯」2009.10資料

「顕彰隱密」についての諸説

- 1、月筈『称讚浄土経駕説』二 顕密・隱彰の二義(真全七、二二一)

顕密―顕―言詮の上に顕れたもの

密―その言詮が尽理でないことをいう

隱彰―隱―文の裡に包含されている深義

彰―一經の秘奥の本意が彰れたるをいう

- 2、法霖『笑螂臂』上之下(真全六〇、一四四)

顕・彰・隱密の三義

顕・彰・隱・密の四義

三義

顕―文に顕れた方便義

彰―定散文中に彰れている弘順顕露の文―第七華座觀「住立空中尊」、

第九真身觀「光明遍照」の文

隱密―文の裏に隠れている弘願義

四義

顕―顕文定散

彰―弘願が文に彰れているもの

隱―弘願が文に隠れているもの

密―二尊の密意 釈尊が要門を説くときには弘願を密とし、

弥陀が弘願を説くときには要門を密とする

- 3、僧樸『顕彰隱密義』(真全六二六、二五九)

顕・隱・顕彰・隱彰の四義 密は全体にかかる

顕——定散諸善を顕していること

隠——弘願が『観経』では文裏に隠れていること

彰——弘願を彰すこと

隠彰——隠即彰 隠れている弘願の義

顕彰——顕文の上において直ちに弘願を彰しているもの

密——隠顕に通じて、如来の密意の弘深なるをいう

4、柔遠『六要紗指玄録』卷十二二二丁

顕・隠・彰の三義 密はその三におよぶ本仏の密意

顕——経文の順説。定款二善を説くもの。

隠——隠覆の義。弘願が定散の文に隠覆されていること。

彰——文中に隠れている事端が彰れていること——住立空中尊・撰取不捨の文

隠と彰は、真実を隠すか、その一端を彰すかの違いであり、体は一つ。

故に下に合して隠彰という。

密——顕彰隠を明す本仏の密意をいう

5、善譲『真宗論要』(『真叢』一—六五二)

顕・彰の二義

顕——顕相。釈迦の顕。弥陀教は、隠れる。権が実を覆う。

しかし顕の顕たる所以は、隠影よりこれを知る。

隠彰——定散に隠覆せられてあるものを彰と名づくるは、定散の底に弘願ありと指図

するのが彰のすがたで、銓表の意。上に「開三輩三心」とあり、その下に利他の一心が廻り込んである故に「演暢」という。上に「顕定散諸善」とあり、その下に弘願満ちてあり。上に覆う定散を方便とするところ、下にある弘願自ら彰る。

Q 親鸞聖人の観経の読み方如何

A 頭と彰の読み方がある。

頭 文の表にはつきりと頭われているいわれを読む

彰(隠密) 密かに隠れて彰わされているいわれを読む

Q 文証如何

A 「化身土文類」観経隠頭(『註釈版』381頁)

釈家の意によりて『無量寿仏観経』を案ずれば、頭彰隠密の義あり。

頭といふは、すなはち定散諸善を頭し、三輩・三心を開く。しかるに二善・三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自力各別にして、利他の一心にあらず。如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。これはこの経の意なり。すなはちこれ頭の義なり。

彰といふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多(提婆達多)・闍世(阿闍世)の悪逆によりて、釈迦微笑の素懐を彰す。韋提別選の正意によりて、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの経の隠彰の義なり。

Q 釈家の意とは？

A 善導大師『観経四帖疏』の意で、特に「玄義分」序題門の要弘二門を承けている。

善導大師 『観経四帖疏』「玄義分」序題門(『七祖篇註釈版』300頁・『註釈版』383頁)

ただ願はくは如来、われに思惟を教へたまへ、われに正受を教へたまへ」といふによりて、しかも娑婆の化主(釈尊)はその請によるがゆゑにすなはち広く浄土の要門を開き、安樂の能人(阿弥陀仏)は別意の弘願を頭彰したまふ。

その要門とはすなはちこの『観経』の定散二門これなり。

「定」はすなはち慮りを息めてもつて心を凝らす。

「散」はすなはち悪を廃してもつて善を修す。

この二行を回して往生を求願す。

弘願といふは『大経』(上・意)に説きたまふがごとし。

Q 頭彰、要弘それぞれ内容を示せ

A 頭(要門) 定・散の諸善

三輩・三心、二善・三福

彰(弘願) 如来の弘願

利他通入の一心

口頭の義

定 姿勢を正し、雑念を去り、注意力を浄土の一点に集中して、経に説かれているとおりに浄土のすがたを想い描き、仏や菩薩の姿をまのあたり想いうかべていく修行

散 日常的な散り乱れた心のままで、悪行をやめて善き行いを実践していくこと

福 善と同義。自他にしあわせをもたらす行い

行福 大乘の行。自他ともにさとりを完成しようと願う菩提心を起こして、大乘經典を誦誦し、そこに説かれているさまざまな善行を自分も行い、人にも勧めていくこと

戒福 部派仏教の戒行。戒律をたもち、生活を浄化していく

世福 父母に孝養をつくし、仁義礼智信といった世俗の生活における徳目を実践していくこと

Q 下品はどんな人？

A 悪業を行ってきた。罪の軽・次・重によって三種に分けた。

Q その人が往生する因行は？

A 散乱心のままに称名をするので散善で、大乘の行なので行福にあたる。

Q 諸善・三心とは？

A 定善・散善の行と信。

Q 定善・散善の行の特徴は？

A 一人一人の人生でどれだけ善を行ったかが違う。行が違うので信も違う。したがって往生にも差があるので三種や更に細かく九種の因果が説かれる。千差万別を総じて上中下の三輩という。

Q 諸機の三心とは？

A 至誠心・深心・廻向発願心の三心。

定善と組み合わせば、観念の行を往生行に転換する自力の三心

三福散善と組み合わせば、三福行を往生行と転換する自力の三心

Q 如来の異の方便、欣慕浄土の善根とは？

A 「諸仏如来有異方便」といへり、すなはちこれ定散諸善は方便の教たることを顕すなり。『註釈版』382頁)

□彰の義

Q 如来の弘願とは？

A 阿弥陀如来のひろく大きな願いで、『無量寿経』に説かれる第十八願の願力によって往生せしめられることをいう。行文類に積がある。『註釈版』168頁) また、『観経』では住立空中尊と光明摂取が弘願法。

「行文類」大行釈 引文 (『註釈版』168頁)

【29】 またいはく(玄義分三〇一)、「弘願といふは『大経』の説のごとし。一切善悪の凡夫、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗(乗の字、駕なり、勝なり、登なり、守なり、覆なり)じて増上縁とせざるはなし」と。

【現代語版】 「弘願というのは『無量寿経』に説かれている通りである。善人も悪人もすべての凡夫が往生できるのは、みな阿弥陀仏の大いなる本願のはたらきに乗じる「(乗の字は、かごにのるといふ駕の意味であり、自力にまさるといふ勝の意味であり、舟にのるといふ登の意味であり、仏に守られているという守の意味であり、おおわれ護られるという覆の意味である)」のであり、これをもっともすぐれたはたらきとしないものはない」

Q 釈迦微笑の素懐とは何か？

A 阿弥陀仏と釈尊が一致して機法の二実を示す。

すなわち最下の悪機が他力に帰することが二尊の意。

Q 彰（弘願）の行は？。

A 下下品「具足十念称南無阿弥陀仏」

Q 根拠は如何？

A 「流通分」に名を持つことがこの経の本意であることが知れる。

『観経』（『註釈版』117頁）

仏、阿難に告げたまはく、「この経をば（極楽国土・無量寿仏・觀世音菩薩・大勢至菩薩を觀ず）と名づく。また（業障を淨除し諸仏の前に生ず）と名づく。なんぢまさに受持すべし。忘失せしむることなかれ。この三昧を行ずるものは、現身に無量寿仏および二大士を見ることを得。もし善男子・善女人、ただ仏名・二菩薩名を聞くに、無量劫の生死の罪を除く。いかにいはんや憶念せんをや。もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩・大勢至菩薩、その勝友となる。まさに道場に坐し諸仏の家に生ずべし」と。仏、阿難に告げたまはく、「なんぢ、よくこの語を持て。この語を持てといふは、すなはちこれ無量寿仏の名を持てとなり」と。

善導大師『観経四帖疏』流通分（『註釈版七祖篇』500頁）

六に「仏告阿難汝好持是語」より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、退代に流通せしめたまふことを明かす。上来定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつばら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

Q 頭の義の称名と、彰の義の称名との違いは何か？

A 頭の称名は自業自得の道理で散善の劣行。

彰の称名は阿弥陀仏の願力に乗託している行業で、定善でも散善でもない。選択本願の最勝の行。

Q 利他通入の一心とは何か？

A 利他とは利他力のことで、阿弥陀仏が衆生に恵み与えるはたらき

通入とは定機も散機も同じく願力に乗じて浄土へ通入すること

一心とは三心即一の深心。自利格別の三心に対する。たまわりたる信心。

『大経』至心・信樂・欲生我国

『観経』至誠心・深心・廻向発願心

■【義相②】『小経』隠顯
小経全体の図

流通分	正宗		序分
	証誠段	因果段	依正段
		執持名号	光寿二無量
難信之法			依報 浄土
			方処 西方 距離 經過・超過 正報 仏 今現在説法 衆生 無有衆苦 聖衆 浄土莊嚴
	<ul style="list-style-type: none"> ・諸仏に讃嘆される ・仏となった ・阿弥陀仏不可思議 功德を信ぜよ ・仏の所説と法門の名を聞く者は不退転を得る 	<ul style="list-style-type: none"> ・因 往生するには執持名号 ・果 往生した者は不退の菩薩 一生補処の菩薩 	<ul style="list-style-type: none"> 1 宝樹圍繞 2 七宝蓮池 3 天樂華雨 4 化鳥法音 5 微風妙音
		果 できるよ うになっ た	

- Q 親鸞聖人の小経の読み方如何
- A 顕と彰の読み方がある。
- Q 文証如何
- A 「化身土文類」小経隠顕（『註釈版』397頁）

『観経』に准知するに、この『経』にまた顕彰隠密の義あるべし。

顕といふは、
 経家は一切諸行の少善を嫌貶して、
 善本・徳本の真門を開示し、
 自利の一心を励まして
 難思の往生を勧む。

顕（方便）
 彰（真実）

流通分	正宗分		序分
	証誠段	因果段	依正段
		執持名号	光寿二無量
<p>難思の往生 一切諸行の少善を嫌貶 善本・徳本の真門を開示</p>			
<p>自利の一心</p>			
<p>「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり。「持」の言は不散不失に名づくるなり。「一」の言は無二に名づくるの言なり。「心」の言は真実に名づくるなり。</p>			
<p>眞実難信の法</p>			

彰といふは、
 眞実難信の法を彰す。
 （中略）

「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり。
 「持」の言は不散不失に名づくるなり。
 「一」の言は無二に名づくるの言なり。
 「心」の言は真実に名づくるなり。

この『経』（小経）は
 大乘修多羅のなかの無問自説経なり。
 （↓仏の本意の教説）

三経の大綱、顕彰隠密の義ありといへども、
 信心を彰して能入とす。

各項で目標設定してみる。平成二二年度「三経隠頭」判決に従って会読案を作ってみる。

一、准知の経釈

なぞらえる『観経』の隠頭構造

二、『阿弥陀経』の顕説の義

① 嫌貶開示

「真門」の語があらわす2つの性質

② 教説における隠頭のかかる箇所

因果段の内容と隠頭の確認

③ 第二十願の行・信・証

願文にて確認

三、『阿弥陀経』の隠彰の義

① 難信の法

悪世に難信之法を説かれたこと。

出世本懐であること。

② 教頓機漸

教頓 真実義

機漸 聞損

□一、准知の経釈

Q 出抛の文を挙げよ

A 『観経』に准知するに、この『経』にまた顕彰隠密の義あるべし。

Q 宗祖は『観経』はどんな経だと見ているか。

A 顕彰隠密の義あり。

(文証) 依釈家之意、按無量寿仏観経者、有顕彰隠密義。(二、一八五)

Q 「釈家之意」とは何を指すか

A 善導大師の『観経疏』「玄義分」

今此観経即以観仏三昧為宗、亦以念仏三昧為宗。一心廻願往生浄土為体。(一、六六〇)

また、『観経疏』「散善義」、「仏号阿難汝好持是語」以下の名号付属を釈して、

上来雖説^{レモ}定散^ニ両門之益^ヲ、望^ニ本願^ニ意^ニ在^リ衆生^ヲ一向^ニ専^ラ称^ニ彌陀^ノ名^一。

(一、九七二) などの文に依ったものである。

Q 『観経』の顕彰隠密の義、如何。

A 『観経』(二、一八七)

言頭者、

—

即顕定散諸善、

開三輩・

三心。

然二善・三福、

非報土真因。

諸機三心、自利各別而非利他一心。

如来異方便、欣慕浄土善根。

是此経之意、即是顕義也。

この法門は自力諸行による化土往生の法門であって、真実報土の往生をあらわす法門ではない。

行

機類

信 自力の至誠心、深心、廻向発願心

だから定散二善・世戒行の三福は

果 報土の真因では無い。

信 自利格別の三心

仏意 欣慕浄土善根

言彰者、

彰如来弘願、演暢利他通入一心。

縁達多・闍世惡逆、

彰釈迦微笑素懐、

因韋提別選正意、

開闡弥陀大悲本願。

斯乃此経隱彰義也。

信 利他通入一心

釈尊の本意

弥陀の本願

真実を方便で隠し、方便をさも真実のごとく説くことによって、聖道に執する者をして浄土願生を勧めようとされる、特別な従仮入真の仏意があることを明かそうとされたものである。

Q 『観経』顕彰隱密義の所顕如何。

A 大観二経の三心一異に答える。

良知、此乃此経ニルコトヲ顕彰隱密之義一。二経三心、将レニ談ニゼムト一異一ヲ、応ニ善思量一ス也。大経・観経依顕義異、依彰義一也。可知。(二、一八九)

と問答を結ばれる。『大経』の三心と『観経』の三心を対比してみると、経の「顕」の義からいえば異なっているが、「彰」の義からいえば二経ともに選択本願を宗としているから一つであると、二経の三心の一異という問いに答えたのである。

Q 『観経』は何によって顕彰隱密を知るや

A 依釈家之意

Q 『小経』は何によって顕彰隱密を知るや

A 『観経』に准知するに

Q なぜ釈家之意に依らないのか。

A 明確に隱顕を示す釈家之意がないから。ゆえに「顕彰隱密の義あり」ではなく、「あるべし」とされている。

Q 宗祖オリジナルか？

A 自力念仏往生の法門を弁別されたのは宗祖の真假論の独自性を物語る。

Q どのように准知されたのか。

A 明言は無いが、おそらく『観経』の下上品の教説とそれに対する善導、法然両祖の指南によ

ると考えられる。(梯實圓和上『顕浄土化身土文類講讀』一三〇頁、三八五頁)

『観経』下上品の文

命終らんとするとき、善知識、ために大乘十二部経の首題名字を讚ずるに遇はん。かくのごときの諸経の名を聞くをもつてのゆゑに、千劫の極重の悪業を除却す。智者また教へて、合掌・叉手して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆゑに、五十億劫の生死の罪を除く。そのときかの仏、すなはち化仏・化観世音・化大勢至を遣はして行者の前に至らしめ、「化仏等の」讚めていはく、「善男子、なんぢ仏名を称するがゆゑにもろもろの罪消滅す。われ来りてなんぢを迎ふ」と。

聞経題の善

往因いまだ成就せず

五称名の善

往因成就

称名の功のみ褒める

『散善義』下上品

しかるに仏の願意に望むれば、ただ勧めて正念に名を称せしむ。往生の義、疾きこと雑散の業に同じからず。

本願の行である念仏と、非本願の行である聞経のような「雑散の業」とでは、その功德は比較にならないほど勝れている。

【参考】 稻城和上は下下品で説明される。

<p>観経 下下品</p> <p>かくのごときの愚人、命終らんとするとき臨みて、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説き、教へて念仏せしむるに遇はん。</p>	<p>唯信鈔文意</p>	<p>稻城選恵和上『阿弥陀経の本義』</p> <p>教える側に自力他力の別は無い</p>
<p>この人、苦に逼められて念仏するに違あらず。</p>	<p>「汝若不能念」(観経)といふは、五逆・十悪の罪人、不浄説法のもの、やまふのくるしみにとぢられて、ここに弥陀を念じたてまつらずは、ただ口に南無阿弥陀仏となへよとすすめたまへる御のりなり。これは称名を本願と誓ひたまへることをあらはさんと</p>	<p>まごころをこめて念仏することができない(聞損)</p>
<p>善友、告げていはく、(なんぢもし念ずるあたはずは、まさに無量寿仏(の名)を称すべし)と。</p>	<p>逆・十悪の罪人、不浄説法のもの、やまふのくるしみにとぢられて、ここに弥陀を念じたてまつらずは、ただ口に南無阿弥陀仏となへよとすすめたまへる御のりなり。これは称名を本願と誓ひたまへることをあらはさんと</p>	<p>まごころをこめて念仏することができない(聞損)</p>

<p>かくのごとく心を至して、 声をして絶えざらしめて、 十念を具足して南無阿弥陀 仏と称せしむ。仏名を称す るがゆゑに、念々のなか において八十億劫の生死の罪 を除く。</p>	<p>り。「応称無量寿仏」（観経）とのべた まへるはこのところなり。「応称」は となふべしとなり。</p>	<p>他力の念仏</p>
---	---	--------------

〇二、『阿弥陀経』の頭説の義

① 嫌貶開示

A Q 『小経』の頭説の釈義如何。

頭といふは、経家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本・徳本の真門を開示し、自利の一心を励まして難思の往生を勧む。ここをもつて『経』(同)には「多善根・多功德・多福德因縁」と説き、釈(法事讃・下)には「九品ともに回して不退を得よ」といへり。あるいは「無過念仏往西方三念五念仏来迎」(同・意)といへり。これはこれの『経』(小経)の頭の義を示すなり。これすなはち真門のなかの方便なり。

A Q 文意如何。

<p>経家は</p>	<p>釈尊は</p>	<p>不可以少善根</p>
<p>一切諸行の少善を嫌貶して、</p>	<p>観経所説の定散諸行を少善であると嫌貶された</p>	<p>福德因縁 得生彼国</p>
<p>善本・徳本の真門を開示し、</p>	<p>【行】一日七日一心不乱の念仏を大善根、多功德、多福德として開示された</p>	<p>聞説阿弥陀仏 執持名号 若一日…若七日</p>
<p>自利の一心を励まして</p>	<p>【信】自力の信心</p>	<p>一心不乱</p>
<p>難思の往生を勧む。</p>	<p>【証】臨終来迎</p>	<p>臨命終時阿弥陀 仏與諸聖衆現在 其前。是人終時、 心不顛倒即得往 生阿弥陀仏極楽 国土。</p>

Q 諸行少善根・念仏多善根の指南は何によるか

A 王日休『龍舒増広浄土文』巻一（T四七、二五七）

「阿弥陀経脱文」

T1970_47.0257a11: 阿彌陀經脱文

T1970_47.0257a12: 襄陽石刻阿彌陀經乃隋陳仁稜所書。字畫

T1970_47.0257a13: 清婉。人多慕玩。自一心不亂而下云。專持名

T1970_47.0257a14: 號以稱名。故諸罪消滅。即是多善根福德因

T1970_47.0257a15: 緣。今世傳本脱此二十一字。

『選択集』多善根章（一、一三一六）

【13】 念仏をもつて多善根となし、雑善をもつて少善根となす文。

『阿弥陀経』にのたまはく、「少善根福德の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず。舍利弗、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持して、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、心を一にして乱らずは、その人命終の時に臨みて、阿弥陀仏もろもろの聖衆と現じて、その前にまします。この人終時に心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」
P-1275
と。

善導この文を釈していはく（法事讃・下）、

「極楽無為涅槃の界には、縁に随ふ雑善はおそらくは生じがたし。

ゆゑに如来（釈尊）、要法を選びて、教へて弥陀を念ぜしむること專にしてまた專ならしむ。

七日七夜、心無間なれ。長時に行を起すもますますみなしかなり。

終りに臨みて聖衆、華を持ちて現じたまふ。身心踊躍して金蓮に坐す。

坐する時にすなはち無生忍を得。一念に迎へ將て仏前に至る。

法侶衣をもつて競ひ来りて着す。不退を証得して三賢に入る」と。

わたくしにいはく、「少善根福德の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず」といふは、諸余の雑行はかの国に生じがたし。ゆゑに「随縁雑善恐難生」といふ。少善根とは多善根に対する言なり。しかればすなはち雑善はこれ少善根なり、念仏はこれ多善根なり。ゆゑに龍舒の『浄土文』にいはく、「襄陽の石に『阿弥陀経』を刻れり。すなはち隋の陳仁稜が書けるところの字画、清婉にして人多く慕ひ玩ぶ。〈一心不乱〉より下
P-1276

に、〈專持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁〉といふ。今世の伝本にこの二十一字を脱せり」と。^{以上}ただ多少の義あるのみにあらず。また大小の義あり。いはく雑善はこれ小善根なり、念仏はこれ大善根なり。また勝劣の義あり。いはく雑善はこれ劣の善根なり、念仏はこれ勝の善根なり。その義知るべし。

これらを証文としている。

『化身土文類』(二、二〇四)

【51】元照律師の『弥陀經の義疏』には、「如来、持名の功勝れたることを明かさんと欲す。まづ余善を貶して少善根とす。いはゆる布施・持戒・立寺・造像・礼誦・座禪・懺念・苦行、一切福業、もし正信なければ、回向願求するにみな少善とす。往生の因にあらず。もしこの經によりて名号を執持せば、決定して往生せん。すなはち知んぬ、称名はこれ多善根・多福德なりと。むかしこの解をなしし、人なほ遲疑しき。近く襄陽の石碑の經の本文を得て、理冥符せり。はじめて深信を懐く。かれにいはく、善男子・善女人、阿弥陀仏を説くを聞きて、一心にして乱れず、名号を専称せよ。称名をもつてのゆゑに、諸罪消滅す。すなはちこれ多功德・多善根・多福德因縁なり」と。〔以上〕

Q 一心とはなぜ一心というのか。

A 二行雑わることなきがゆえに。

(文証) 觀經隱顯(二、一九六)

『小本』(小經)には「一心」とのたまへり、

二行雑はることなきがゆゑに一とのたまへるなり。また一心について深あり浅あり。深とは利他眞実の心これなり、浅とは定散自利の心これなり。

Q 二行まじわらないということと心とは関係ないじゃないか

A 所修の行が一行であるから、能修の心も一心であると、行に随えて心に一心と名づけていた。

Q 「また一心について深あり浅あり。」の文意如何。

A 自利の一心は浅薄。利他の一心は深厚。今は前者の自利の一心をもつて嫌貶開示された名号を執持する行信による往生を明かすが、顯の義である。

② 教説における隠顕のかかる箇所

因果段（修因段）

「修因」の語は法然聖人漢語灯録『小経釈』（真聖全四、三六六）による。

小経	顕（方便）	彰隠密（真実）
<p>舍利弗、少善根福德の因縁をもつてかの国に生ずることを得べからず。</p> <p>舍利弗、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、</p> <p>名号を執持すること、</p> <p>もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、</p> <p>一心にして乱れざれば、</p> <p>その人、命終のときに臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にまします。この人終らんとき、心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。舍利弗、われこの利を見るがゆゑに、この言を説く。もし衆生ありて、この説を聞かんものは、まさに發願してかの国土に生るべし。</p>	<p>多善根を回向すれば往生</p> <p>不如実の聞 如来会第二十願 「聞説我名以己善根回向極楽」</p> <p>執持を心念ととれば心に名号を憶念して忘れず、称名ととれば誦念して忘れず『狐山の疏』『信力故執受』『念力故住持』（205）</p> <p>自力起行の一心をもつて名号を称念する</p> <p>従少向多 自力念仏 一生涯多善根を積植策励 一がスタート、七が完成。『漢語灯』四、369）</p> <p>自力起行の一心</p> <p>臨終来迎</p>	<p>名号は万徳の所帰であつて一念一無上・十念十無上の利益</p> <p>如実の聞 仏願の生起本末を聞きて疑心有ること無し</p> <p>他力の信心 執は心、堅牢にして移転せず。持は不散不失に名づく。『略典』『執持即一心』（275）</p> <p>「若」は乃至 自力無功 信相続</p> <p>他力の信心 一は無二、心は真実</p>

③第二十願の行・信・証

『大経』(一、二六)

設我得仏、十方衆生、聞我名号、係念我国、植諸徳本、至心廻向欲生我国、不果遂者、不取正覺

『如来会』(一、三〇三)

若我成仏、無量國中諸有衆生、聞説我名、以己善根、廻向極樂。若_レ不生者、不取菩提。

『化身土文類』(二、一九八)

【37】 また問ふ。『大本』(大経)と『觀経』の三心と、『小本』(小経)の一心と、一異いかなぞや。

答ふ。いま方便真門の誓願について、行あり信あり。また真実あり方便あり。願とはすなはち植諸徳本の願これなり。

行とはこれに二種あり。

一つには善本、

二つには徳本なり。

信とはすなはち

至心・廻向・欲生の心これなり。〔廿願也〕

〔頭注〕

機について定あり散あり。

往生とはこれ難思往生これなり。

仏とはすなはち化身なり。

土とはすなはち疑城胎宮これなり。

行

諸徳本

『行文類』

大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。

『化身土文類』(二、二〇〇)

善本とは如来の嘉名なり。この嘉名は万善円備せり、一切善法の本なり。ゆゑに善本といふなり。徳本とは如来の徳号なり。この徳号は一声称念するに、至徳成満し衆禍みな転ず、十方三世の徳号の本なり。ゆゑに徳本といふなり。

植(積植の義)

『大経』法蔵修行(一、三二)

於_{ニテ}不可思議_ノ兆載永劫_ニ、積植_{ニシテ}菩薩_ノ無量_ノ德行_ヲ

信

廻向

念仏の功德を積んで廻向して往生しようとする心

定散心 定善散善の時と同じ、自力のはからい心で念仏一行を修する。
一心

『化身土文類』(二、一九六)

『觀經』には「深心」と説けり、諸機の浅信に對せるがゆゑに深とのたまへるなり。『小本』(小經)には「一心」とのたまへり、二行雜はることなきがゆゑに一とのたまへるなり。また一心について深あり浅あり。深とは利他真実の心これなり、浅とは定散自利の心これなり。

証

疑城 仏智疑惑の行者が立て籠もっているところ

『往生要集』往生階位 懷感『群疑論』 『菩薩処胎經』

胎宮 母胎に宿っている胎児は、母親を見ることができず、母のような行動を取れない

『大經』胎化段

『化身土文類』要門釈(二、一八三)

つつしんで化身土を顕さば、仏は『無量寿仏觀經』の説のごとし、真身觀の仏これなり。土は『觀經』の浄土これなり。また『菩薩処胎經』等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また『大無量寿經』の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。

『同』(二、一九八)

おおよそ浄土の一切諸行において、綽和尚は「万行」といひ、導和尚は「雜行」と稱す。感禪師は「諸行」といへり。信和尚は感師により、空聖人は導和尚によりたまふ。經家によりて師釈を披くに、雜行のなかの雜行雜心・雜行專心・專行雜心あり。また正行のなかの專修專心・專修雜心・雜修雜心は、これみな辺地・胎宮・懈慢界の業因なり。ゆゑに極樂に生ずといへども三宝を見たてまつらず。仏心の光明、余の雜業の行者を照摂せざるなり。仮令の誓願(第十九願)まことに由あるかな。仮門の教、欣慕の積、これいよいよあきらかななり。

『真仏土文類』(二、一七九)

それ報を案ずれば、如来の願海によりて果成の土を酬報せり。ゆゑに報といふなり。しかるに願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。

〔中略〕(二、一八〇)

仮の仏土とは、下にありて知るべし。すでもつて真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆゑに知んぬ、報仏土なりといふことを。まことに仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身・化土と名づく。真仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す。

『菩薩處胎經』八種身品第八

T0384_12.1028a10: 或有菩薩摩訶薩。從初發意乃至成

T0384_12.1028a11: 佛。執心一向無若干想無瞋無怒。願樂欲生
T0384_12.1028a12: 無量壽佛國。一切衆生其生彼者。四部衆比
T0384_12.1028a13: 丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆同一金色。西方
T0384_12.1028a14: 去此閻浮提十二億那由他。有懈慢界。國土
T0384_12.1028a15: 快樂作倡²伎樂。衣被服飾香花莊嚴七寶轉
T0384_12.1028a16: 關床。舉目東視寶床隨轉。北視西視南視亦
T0384_12.1028a17: 如是轉。前³後發意衆生。欲生阿彌陀佛國
T0384_12.1028a18: 者。⁴皆染著懈慢國土。不能前進生阿彌陀佛
T0384_12.1028a19: 國。億千萬衆。時有一人能生阿彌陀佛國。何
T0384_12.1028a20: 以故。皆由懈慢執心不牢固。斯等衆生自不
T0384_12.1028a21: 殺生。亦教他不殺。有此福⁵報生無量壽國。

口三、阿彌陀經の隱彰の義

①難信の法

Q 彰の釈如何。

A

彰といふは、真実難信の法を彰す。これすなはち不可思議の願海を光闡して、無碍の大信心海に帰せしめんと欲す。まことに勧めすで恒沙の勧めなれば、信もまた恒沙の信なり。ゆゑに甚難といへるなり。釈（法事讚・下）に、「ただちに弥陀の弘誓重なるをもつて、凡夫念ずればすなはち生ぜしむることを致す」といへり。これはこれ隱彰の義を開くなり。

Q 「難信之法」とは

A 信心をえがたきことを『小経』には「一切世間難信之法」（一、一一一）、といい

『称讚浄土教』には「一切世間極難信法」（一、三九七）という。

Q 「難信之法」によつて何が彰されるか？

A ①最勝であること

極難信は阿弥陀仏の本願の領域をあらわした言葉である。

それは完全に分別思議を超えた唯仏与仏の知見の領域である

②他力回向によつてのみ開示されること

③自力無功

如来の本願力回向によつてのみ開示されるから、自力のはからいを以て知ることも信じることとできない

【参考】『唯信鈔文意』（二、七〇七上）真筆本

この信心をえがたきことを、『経』

（称讚浄土経）には、「極難信法」とのたまへり。しかれば『大経』（下）には、

「若聞斯経 信樂受持 難中之難 無過此難」とをしたまへり。この文の「はろは、「もしこの『経』を聞きて信ずること、難きがなかに難し、これにす

P-713

ぎて難きことなし」とのたまへる御のりなり。釈迦牟尼如来は、五濁悪世に出てこの難信の法を行じて無上涅槃にいたると説きたまふ。さて、この智慧の名号を濁悪の衆生にあたへたまふとのたまへり。十方諸仏の証誠、恒沙如来の護念、ひとへに真実信心のひとのためなり。釈迦は慈父、弥陀は悲母なり。われらがちち・はは、種々の方便をして無上の信心をひらきおこしたまへるなりとするべしとなり。おほよそ過去久遠に三恒河沙の諸仏の世に出でたまひしみもとにして、自力の菩提心をおこしき。恒沙の善根を修せしによりて、いま願力にまうあふことを得たり。他力の三信心をえたらんひとは、ゆめゆめ余の善根をそしり、余の仏聖をいやしうすることなかれとなり。

Q 「これすなはち不可思議の願海を光闡して」文意如何。

A 光闡とは「ひろくひらく」（二、九）ことで、釈尊をはじめ十方の諸仏が、不可思議の願海

を讚嘆・証誠して十方に等しく広められることをいう。

Q 「無碍の大信心海に帰せしめんと欲す。」文意如何。

A 無礙 善人も悪人も障り無く

海 同一鹹味に引き入れる

信心を恵み与えるのが隱彰の義であった。

Q 「まことに勧めすでに恒沙の勧めなれば、信もまた恒沙の信なり。ゆるぎに甚難といへるなり。」の文意如何。

A 自力では決して発起することのできない真実の信心を、諸仏の証誠の善巧によって恵まれたことを慶び讚仰する意。

Q 「ただちに弥陀の弘誓重なるをもつて、凡夫念ずればすなはち生ぜしむることを致す」の文意如何。

A この法事讚の文は諸仏出世本懐を表している。

(文証)『一念多念文意』

「直為弥陀弘誓重」といふは、「直」はただしきなり、如来の直説といふなり。諸仏の世に出でたまふ本意と申すを直説といふなり。

【参考】

『法事讚』(一、八五一〜八五二)

【89】 下、高に接ぎて讚じていへ。

願はくは往生せん、願はくは往生せん。如来(釈尊)五濁に出現して、よろしきに随ひて方便して群萌を化したまふ。あるいは多聞にして得度すと説き、あるいは少解をもつて三明を証すと説く。あるいは福慧ならべて障を除くと教へ、あるいは禅念して坐して思量せよと教ふ。種々の法門みな解脱すれども、念仏して西方に往くに過ぎたるはなし。上一形を尽し十念に至り、三念・五念まで仏来迎したまふ。ただに弥陀の弘誓重きがために、凡夫をして念ずればす

P-576

なはち生ぜしむることを致す。衆等、心を回してみな往かんと願じて、手に香華を執りてつねに供養したてまつれ。

下、高に接ぎて讚じていへ。

【参考】

『三部経大意』(真聖全四、七九六)

しかるを阿弥陀如来、善導和尚となりて、唐土にいでてのたまはく、「如来出現於五濁、隨宜方便化群萌。或説多聞而得度、或説少解証三明、或教福慧雙除障、或教禅念坐思量。種種法門皆解説、無過念仏往西方。上尽一形至十念、三念五念仏来迎。直為弥陀弘誓重、致使凡夫念即生。」(法事讚卷下)釈尊出世の本懐、ただこのことにありといふべし。

②教頓機漸

教頓

名号はもともと往生行

機漸 不回向である名号を回向する（いらんことをする）
仏意を正確に受け取っていない。

Q 「教頓機漸」の釈文を挙げよ。
A (二、二〇〇)

それ濁世の道俗、すみやかに円修至徳の真門に入りて、難思往生を願ふべし。
真門の方便につきて、

行 善本あり徳本あり。

信 また 定専心あり、また散専心あり、

また 定散雑心あり。

信 定散雑心 雑心とは、大小・凡聖・一切善悪、

おのおの助正間雑の心をもつて名号を称念す。

まことに教は頓にして根は漸機なり。

行は専にして心は間雑す。ゆゑに雑心といふなり。

定散の専心とは、罪福を信ずる心をもつて本願力を願求す、

これを自力の専心と名づくるなり。

行 善本とは如来の嘉名なり。この嘉名は万善円備せり、一切善法の本なり。

ゆゑに善本といふなり。

徳本とは如来の徳号なり。この徳号は一声称念するに、至徳成満し衆禍

みな転ず、十方三世の徳号の本なり。ゆゑに徳本といふなり。

(定散雑心)

Q 標列と釈文の行信次第、どう理解する？

A 標列は願文の順。釈文は能修の心から善本徳本の名を得る故に信行次第。

Q 能修の心とは如何。

A まず定散雑心から積される。

Q 定散雑心とは如何。

A 助正間雑の心。

Q 助正間雑とは如何。

A 本来はこの言葉は、正定業の称名を前三後一の助業と同格に見なし、助正を兼行することを指していたが、今は嫌貶開示して称名一行を専修している上という。

Q 助正は行を指していないというのか。

A 本願を見失って助正を雑えて修している要門位の自力心と同質の自力心であることを「助正兼雑の心」という。

Q 「教は頓にして」の文意如何。

A 万善円備の名号を称念する。名号法は頓速に成仏せしむる教法であることをいう。

Q 「根は漸機なり」の文意如何。

A 要門位の自力心をもって領解し、行者の功によって往生の果に個人差があるような化土に生まれる。さらに回心しなければ報土に生まれることはない。このような迂回の仏道に退落している機を漸機という。真門の構造を教頓機漸とすることによって、機と教とが望め合わせて真門が

起こっていることが明らかになる。

(定散の専心)

Q 化身土文類の「専心」の积例如何。

A

		本典	目指している事柄
要門 197	また雑行について、専行あり専心あり、また雑行あり雑心あり。専行とはもつぱら一善を修す、ゆゑに専行といふ。専心とは回向をもつぱらにするがゆゑに専心といへり。雑行・雑心とは、諸善兼行するがゆゑに雑行といふ、定散心雑するがゆゑに雑心といふなり。	聖道門から浄土門へと転入させる初門であるから、浄土に望めて専ら浄土を願生し所修の善を浄土に回向せよと勧める	
要門 197	また正・助について専修あり雑修あり。この雑修について専心あり雑心あり。専修について二種あり。一つにはただ仏名を称す、二つには五専あり。この行業について専心あり雑心あり。五専とは、一つには専礼、二つには専読、三つには専観、四つには専称、五つには専讚嘆なり。これを五専修と名づく。専修、その言一つにして、その意これ異なり。すなはちこれ定専修なり、また散専修なり。専心とは、五正行をもつぱらにして、二心なきがゆゑに専心といふ。すなはちこれ定専心なり、またこれ散専心なり。雑修とは、助正兼行するがゆゑに雑修といふ。雑心とは、定散の心雑するがゆゑに雑心といふなり、知るべし。	五専の一行をそれぞれふたごころ無く専修すること（行に随えて积す）	
真門 200	定散の専心とは、罪福を信ずる心をもつて本願力を願求す、これを自力の専心と名づくるなり。	信罪福心（自力心）をもつて専ら本願力の救いを願求すること（法に望めて积す）	

『愚禿鈔』下（二、三〇〇）

また弥陀念仏について、二種あり。

P--530

- 一には正行定心念仏、
 - 二には正行散心念仏なり。
- 弥陀定散の念仏、これを浄土の真門といふ、また一向専修と名づくるなりと、知るべし。

□「化身土文類」小経隔頭(『註釈版』398頁)

いま三経を案ずるに、みなもつて**金剛の真心**を最要とせり。

真心はすなはちこれ大信心なり。

大信心は希有・最勝・真妙・清浄なり。

なにをもつてのゆゑに、

大信心海ははなはだもつて入りがたし、仏力より發起するがゆゑに。

真実の楽邦はなはだもつて行き易し、願力によりてすなはち生ずるがゆゑなり。(中略) **三経一心の義、答へをはんぬ。**

(現代語訳版)

いまこの三経をうかがうと、みな決して損なわれることのない真実の心をまさになめとしている。その真実の心とは他力回向の信心である。この信心は、たぐいまれな、もつともすぐれた、真実の、清らかな心である。どうして信心の大海には入ることが難しいのかというと、この信心は仏力によっておこるからである。しかし、真実の浄土に往生することとはとてもやさしい。それは本願のはたらきによってただちに往生できるからである。(中略)

これで、この三経に説く教えはみな他力の信心をかなめとするということについて答えおわった。

□三経の内容をおさらい

『口伝鈔』(『註釈版』900頁)

大 **法実** 第十八願の内容を広く説き明かした

機権 聞いている方々は浄土から来現された還相回向の菩薩たち

八相成道してさとりを完成したブツダが権(かり)に菩薩や声聞の姿を取って説法を聞きに來られている。説く者(釈尊)と聞く者(菩薩)はおなじスキル。

大経はブツダがブツダに向かって「真実の法は本願の念仏である」と説いた

観 **法権** 定善・散善は方便

自力修行に堪えられない自身の真実の姿を知らせて自力を捨てさせ、本願他力の念仏に引き入れる

機実 凡夫 (代表 愛憎に翻弄される韋提希)

小 **機法合説**

嫌貶 不可以小善根福德因縁得生彼国

開示 一日七日の念仏が往生の行

証誠 念仏往生の教説を不可思議であると讃嘆し、真実であると証明

釈尊を讃嘆 五濁悪世に出現して難信之法を説きたもう

■『三経一論と』教行信証』

『選択集』（註釈版七祖篇）1187頁）

初めに正しく往生浄土を明かす教といふは、いはく**三経一論**これなり。

「**三経**」とは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥陀経』なり。

「**一論**」とは、天親の『往生論』（浄土論）これなり。

あるいはこの三経を指して浄土の三部経と号す。

無量寿経		教行信証		浄土論	
第十七願	教	世尊	大悲願海	第十八願	第十八願
第十八願	行	歸命尽十方無碍光如来	第十八願	第十一願	第十一願
第十九願	信	我一心	第二十二願	第十二願	第十二願
第二十願	証	願生安楽国	第十三願	第十三願	第十三願
	化身土		真仏土		
	方便		真実		
	観無量寿経（頭の義） 阿弥陀経（頭の義）				

□結文をいただく

(二、二〇九)

悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雑し、定散心雑するがゆゑに、出離その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし。おほよそ大小聖人、一切善人、本願の嘉号をもつておのれが善根とするがゆゑに、信を生ずることあたはず、仏智を了らず。かの因を建立せることを了知することあたはざるゆゑに、報土に入る

(山上の感想)

ことなきなり。

所稱の番号は真実であって、難思議往生を遂げるべき行法であるが、能稱の心が要門分齊の自力であるから、化土に止まるといふ失を知らせ、捨てるべき法門であることを明かすため、難思議往生の議の一字を省いて難思議往生といわれた。

捨ててどこへ行くのか。

この第二十願を果遂の願という。願文には「至心回向欲生我国」とあって、我国への往生を果たし遂げることであった。しかしそこは方便化土であって、「その本の罪を識りて深く自ら悔責」（大経胎化段）させるための土であった。

定散自力の称名は

果遂のちかひに帰してこそ

をしへざれども自然に

真如の門に転入する

真如の門へ入らしめることも果遂の内容であった。真門に止まらせない思し召しが果遂の誓いである。

無際よりこのかた自分のやっ来て来たことが確かなものだと思われ続けてきた。三恒河沙の諸仏の出世のみもとにありしときから仏を目指す心を発すほどにお育てにあずかってきたが自力かなわずに流転してきた。はねつけてきた。

このたび今生で仏願力を聞かせてもらっても、おのれが善根とする根性で生きている私に、化土往生の果を示して因の失を知らしめたもうお手回しがあった。

「彼の因建立せること」はもちろん第十八願のおこころであるが、その第十八願の懐の内に第二十願もまた建立されていたと、了知させていた。『雑行を捨てて正行に帰す』と言わず「本願に帰す」と言われたのも仏願力乗託のお言葉であった。

※間違いやお気づきの点があればお知らせ下さい。〒五九九一八一二五 大阪府堺市東区西野5
2 1 旭照寺 山上正尊 senjakuhongan@gmail.com